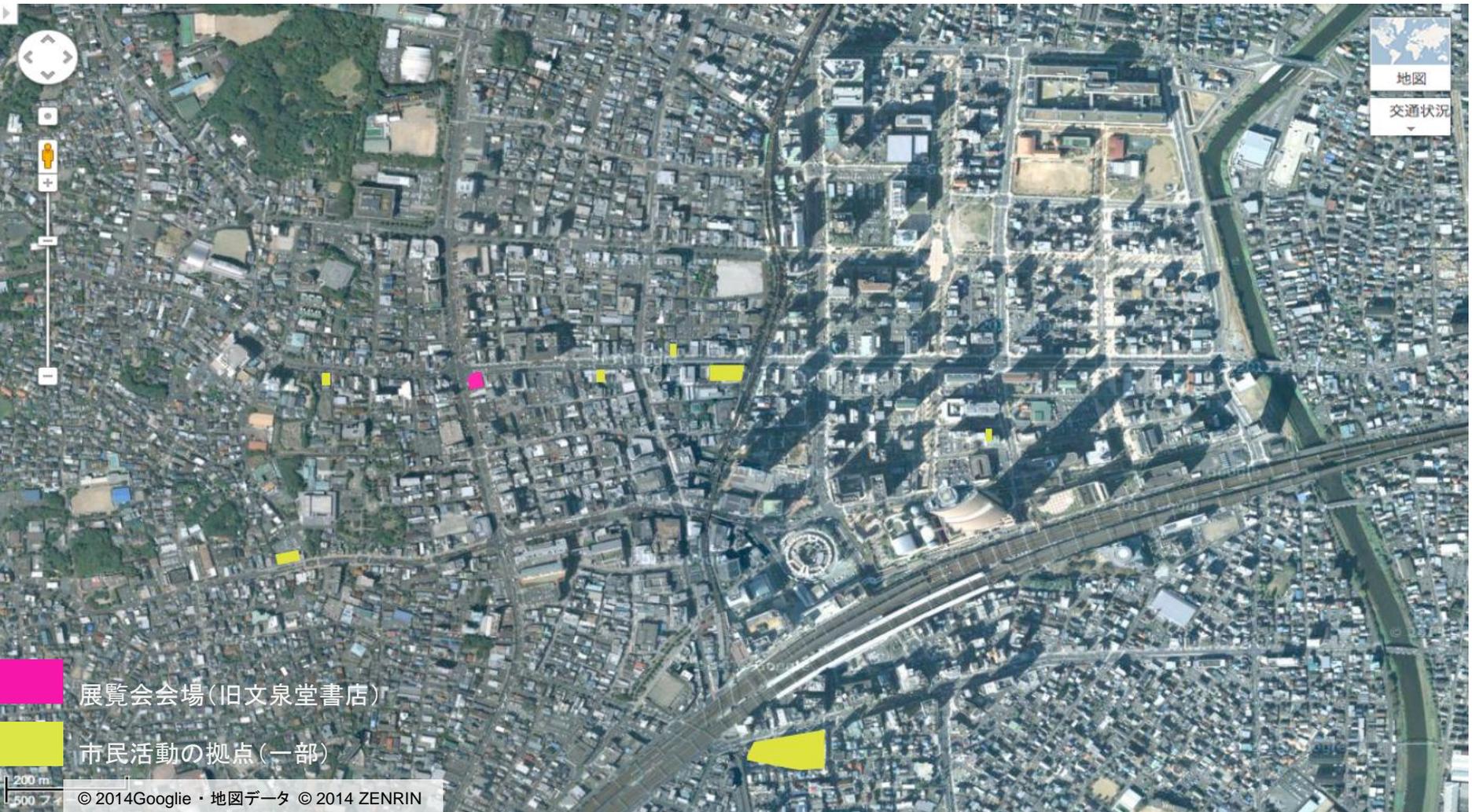


## 文化芸術による地域資源発信事業の研究

平成25年度学長特別研究



磯村克郎(デザイン学部生産造形学科)  
谷川真美(文化政策学部芸術文化学科)  
根本敏行(文化政策学部文化政策学科)



## Projectability

### 主催

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ、静岡文化芸術大学

### 助成

公益財団法人福武財団

浜松市(みんなのはままつ創造プロジェクト)

### 協力

株式会社 高忠商会

### Projectability

～この街で起きていることはどうしておもしろいのか?～

### 推進体制

#### プロデュース

久保田翠( NPO 法人クリエイティブサポートレッツ)

磯村克郎( 静岡文化芸術大学)

谷川真美( 静岡文化芸術大学)

ディレクション……磯村克郎( 静岡文化芸術大学)

キュレーション……鈴木一郎太( 株式会社 大と小とレフ)

プロジェクトエディティング…紫牟田伸子( 紫牟田伸子事務所)

企画……………鈴木一郎太( NPO 法人クリエイティブサポートレッツ)







じいじばあば晴え  
じいじばあば晴え  
じいじばあば晴え

TAKE SPACE

TAKE SPACE

この空間は、建築家・デザイナーの「SUAC 磯村研究室」が、2014年に完成させた「SUAC 磯村研究室」の展示空間である。この空間は、建築家・デザイナーの「SUAC 磯村研究室」が、2014年に完成させた「SUAC 磯村研究室」の展示空間である。この空間は、建築家・デザイナーの「SUAC 磯村研究室」が、2014年に完成させた「SUAC 磯村研究室」の展示空間である。



プ  
 活  
 ロ  
 表  
 し  
 会  
 し  
 を、  
 はみ  
 詰め  
 は、相  
 して制  
 一方  
 されて  
 ていく  
 して別  
 びつけ  
 のプロ  
  
 協力：  
 株式会社  
 403arch  
 柴幸田伸子  
 Siphon G  
 植田朋美(株)  
 桑田亜由子  
 function(株)  
 株式会社 大



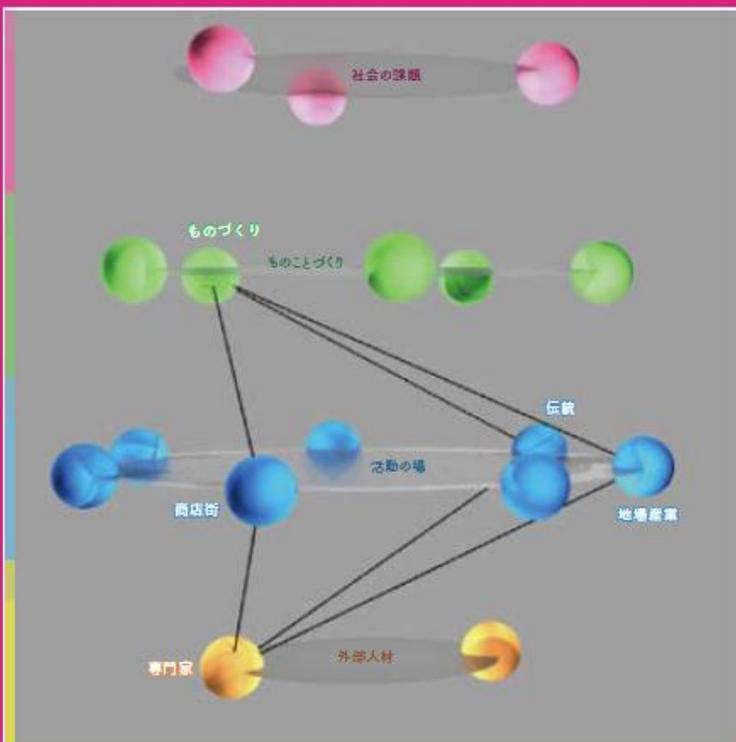












## オリジナル 注染ゆかた

主催団体 / オリジナル 注染ゆかた

### 【団体概要】

浜松で大正時代頃から盛んに行われている注染染めの展開づくりに取り組む任意団体。注染を伝え、普及するため、現在は小ロットの発注窓口づくりに取り組んでいるが、PR活動としてアーティストがデザインした浴衣制作も行っている。

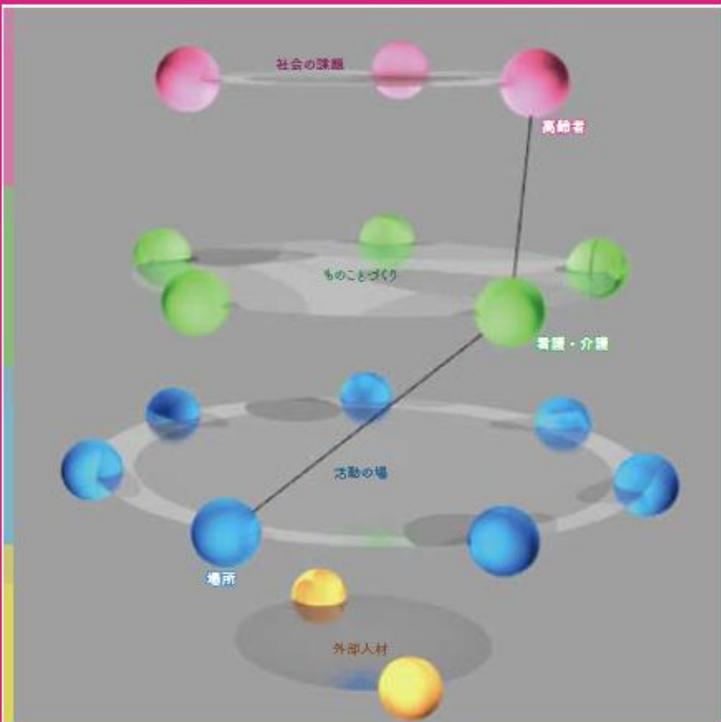
### 【事業概要】

2012年には、浜松在住のアーティスト・戸塚ゆうデザイン浴衣を2パターン、各2色を制作。シーズン中最低3回は着用して外出し、その写真を送ること、レポート提出を条件に、60名に配布した。2013年は、「注染×シルクスクリーンプロジェクト」として、同じく浜松を拠点として活動するアーティスト・スサイタカコにデザインを依頼。染色した後、シルクスクリーンを施し、それぞれの技法の特色を活かした図柄を生み出した。第61回セタゆかた祭り盆踊り会場にて発表。









## じいじばあば萌え

主催団体/じいじばあば萌え

### 【団体概要】

高齢者介護現場のマニュアル化が進むなか、利用者と職員の関係性がサービス一辺倒になる傾向がある。その元となる職員個々の視点、日常的に起こる出来事の見え方などに、一種の“萌え”的な要素がある点に着目し、その大切さを掘り下げること、その伝達を考えること、を目的として、介護施設職員、福祉職員、高齢者と同居する個人などで構成されるゆるやかな集まり。

### 【事業概要】

変則的な個々のスケジュールや、立ち上げたばかりの団体であることを考慮し、メンバー間で日常生活や職場、日々の暮らしで出会った出来事、記事、エピソードなどを交換し、ネット上での意見交換や議論を通じて、今後の実活動へ移行するための土台づくりをしている。2013年は、現場のエピソードや考えを元にし、まちと融合させた高齢者介護施設の提案模型を、静岡文化芸術大学デザイン研究科と空間造形学科にて建築を学ぶ学生たちの協力を得て制作した。

「おじちゃん、おばあちゃんってこんなにかわいいんだよ」「うん、かわいいよね」「こんなところもかわいい」と高齢者に日常的に問われる人々が情報を共有する。それが「じいじばあば萌え」と名付けられたゆるやかな集まりである。いったい、彼らはおじちゃん・おばあちゃんのどこに「萌え」、ているのだろうか。「じいじばあば萌え」を生み出すきっかけとなった人にお話をうかがった。

### — どういうところに「萌え」るんですか？

入れ歯がないところはいいですねえ。口がうるわ形になっているのがたまらない。それで喋っているときはすごくかわいい。なにせ一生懸命なんです。絶対に聞かない聲を聞けようとしているときもかわいいし、すぐおもしろいつり話をしてくれるところもかわいい。「巨大な聲が村を襲った」というエピソードを話してくれるとか、お尻の穴は傘で開けたんだとか、どこから出たんだろうというお話をいっぱいしてくれます。おせんべいを割ってくれようとするんだけど、手で割れないので、割で割ったのをくれたりかします。歯面の笑顔で！かわいいですよね。家で同居している人は、おばあちゃんが一生懸命移動しているところとかも、いとおしくてたまらないと思います。もう、いろいろ。ひとりひとり萌えるポイントは違います。ある男の子は、おじちゃんのふわふわした二の腕が好きだって言っています。

共通の関心意識は、「おじちゃん・おばあちゃんに接すること」と「介護という職業の現状」との距離だった。身近に接することで生まれる「かわいいなあ」という感情が介護という仕事の中では行き場がないという現実。「感情」を言葉に吐き出すことで、ひとつの小さな疑問が波紋となって広がっていく。

### — ギャップを感じるというのはどういうところですか。

家族は面会に来るのが長くても2、3時間だとすれば、残りの20時間くらいを私たちが一緒に過ごしているわけです。かわいい顔をして、かわいい聲音を言っているおじちゃん・おばあちゃんを家族は知らない。病状に関係ないとしても、面会に来たご家族に伝えたくてしょうがないんですね。

そういうことを家族に伝えると喜んでくださるんです。そのつながりがあればもっといいの、もっとケアに活かしたいのって感じるんですよ。

そういうときに「かわいい」という表現は患者様に対して使うべきじゃないとか言われると、「どうして？ 人間なのになぜ？」と思うんです。「かわいい」とか「おもしろい」とかいうのは高齢者を幼稚化していると言われる。じゃあ、このかわいいと思った私の感情はどうしたらいいんだろう。同じ仕事なのに、子どもならかわいくて高齢者なら驚くべきというはわからない。同世代の子がしたってかわいいものはかわいいたいだろうし、そこいらへんがしっくこなくて……。人間としての動作を愛おしいと思ったり、かわいそうだと思うことが専門家として許されないというか……。

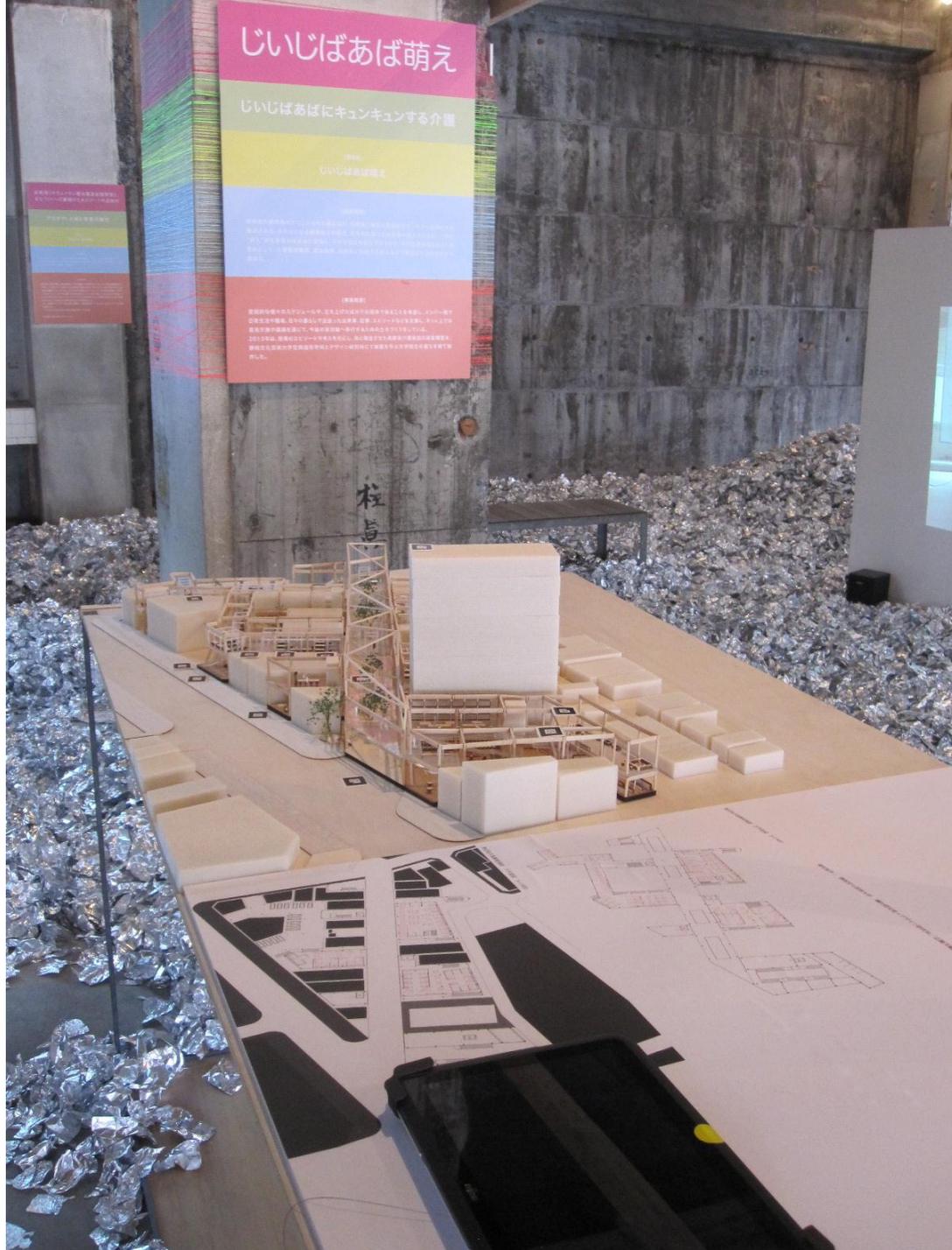
でもそう思うことと、専門的に分析するという思考は違うんですよ。「かわいそうに」と思うところと「では、どうしてあげればいいのか」と思う分析の能力は別の話だと思うんですけど、そう思うこと自体が禁止されてしまうというのが、納得いかなないところなんですよね。

介護の現場ではマニュアル化が進み、サービス一辺倒になる傾向がある。「ホテル並み」のサービスを無数にも提供し、たしかに高齢者に快適である環境をつくることは大切だ。だが、「ホテル的なサービス」というところに集約していくというのはどういうことなのだろうか。

### — 「サービス業」で「マニュアル化」しているというのはどういうことなのでしょうか。

「きのう」ではなく「まじつ」と言えないとか。今、私がいる病棟は医療介護病棟で、基本的に70歳以上の人の方です。末期ガンの方もいらっしゃいますけれど、どちらかというと認知症ですね。おうちではもう書かなくなると、ご家族の方がちよっと辛い、という感じで入床されます。そのまますの住居にならざるを得ないですけれども、例えば立ち上がって歩き回りたい人がいても、歩く危険だから何をするわけでもないのに「座っててください」。立ち上がろうとすると「座っててください」。何度も立ち上がろうとすると、「椅子の座り心地が悪いんじゃないかって、座ってて快適な空間をつくらうとする。「音楽を流しましょう」とか「少し





# じいじばあば萌え

じいじばあばにキュンキュンする介護

2014  
じいじばあば萌え

【概要】  
高齢者の介護施設として、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。この施設では、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。この施設では、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。

【建築概要】  
高齢者の介護施設として、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。この施設では、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。この施設では、高齢者が安心して生活できる環境を整えることが重要。

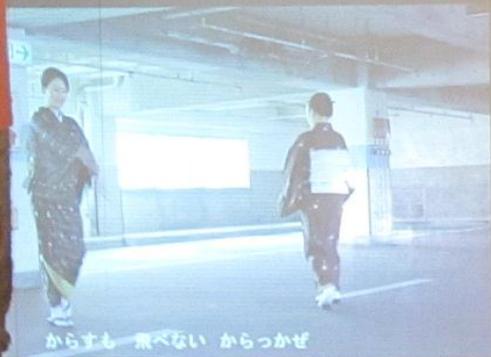
柱  
与



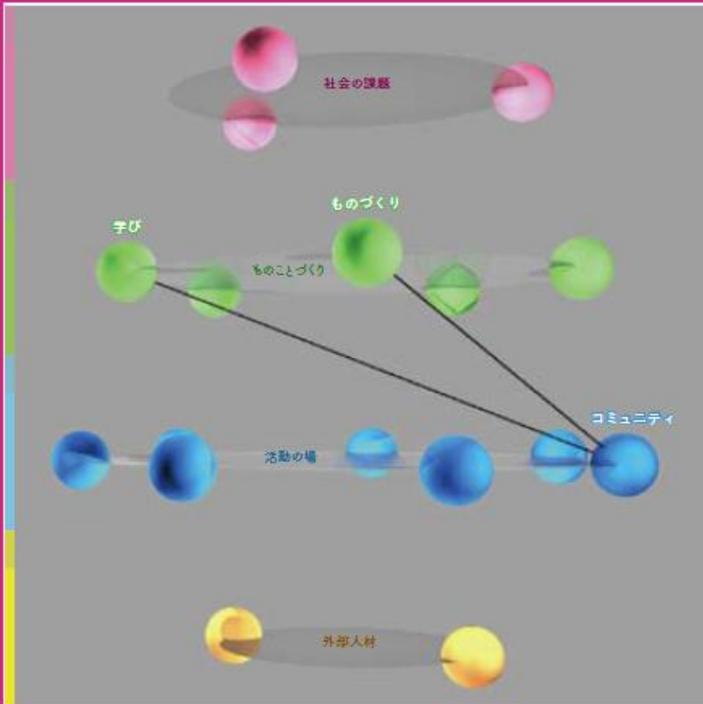
ば萌え

コンクリートの

からすも 飛べない からっかぜ







大学や行政といった大きな後ろ盾があったわけではなく、代表の見識と思いによって始まった。このTAKE SPACEの活動は、随所に個人的なこだわりと、生活との融合を窺えそうとしている努力、試行錯誤が見える。

代表の竹村真人さんが影響を受けているMaker Movementは、「[MAKERS:21世紀の産業革命が始まる]」(Chris Anderson著)の出版を機に、その存在を広く知られることになった動きである。アマチュアや学生によって製品がつくり出され、新しい価値を創造している草の根イノベーションが代表的な事例として挙げられる。それは「[Makers]」や「[Maker Movement]」という言葉を生み出したデル・ドーフ・ファティがTED<sup>®</sup>において繰り返したように、誰もが作り手であり、持って生まれた作り手としての才能を活かせる社会の実現を目指している。



## TAKE SPACE

主催団体 / TAKE SPACE

### 【団体概要】

3Dプリンター、プロッター、レーザーカッターといったデジタル加工機を揃えた会員制の工房。会員に工房を開くだけでなく、ワークショップやトークイベントなどを一般に開いて開催している。元々工場に勤めていた代表の竹村真人がアメリカ発祥の「maker movement」(誰もが製造業者になれるものづくりの運動)に刺激を受け、自宅の倉庫を改装して開設。アメリカのFab Lab, Tech Shop, Hackerspaceを巡ったり、「maker fair japan 2013」などのイベントに参加しつつ、知見を広げながら運営している。

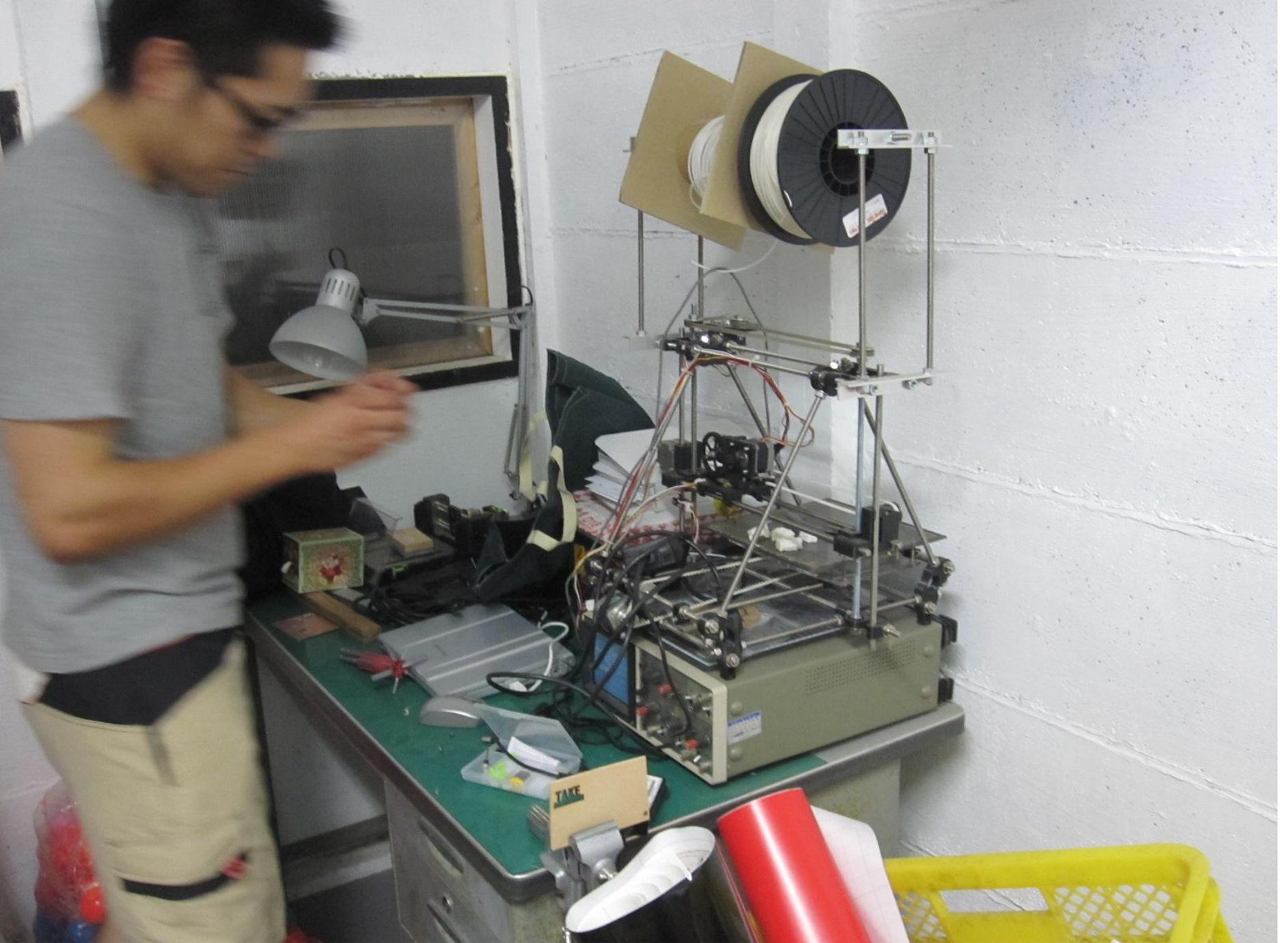
<http://www.take-space.com>

### 【事業概要】

2013年度は浜松市の助成金「みんなのはままつ創造プロジェクト」の参加プロジェクトとして、「3Dプリンター、カッティングプロッター、レーザーカッター等のデジタル加工機を用いた新たな教育プログラムの開発」を展開。トークイベントの開催、近隣小学校におけるデジタル加工機を用いた授業の実施などを行った。







## 座談会

## 地域のプロジェクトビリティ



司会・進行  
紫牟田伸子  
プロジェクトエディター

鈴木一郎太  
株式会社小とレフ 取締役

久保田翠  
NPO法人クリエイティブ  
サポートレッツ理事長

谷川真美  
静岡文化芸術大学  
文化政策学部 芸術文化学科教授

磯村克郎  
静岡文化芸術大学  
デザイン学部 生活造形学科  
デザイン研究科教授

——「プロジェクトビリティ」という展覧会が、浜松という都市から浮かび上がってきたことが興味深く思えます。産業集積地というイメージの強い浜松において、市民の小さな活動が持つ意味をどのようにお考えになっていますか。

**久保田** 私接点をもっている福祉やこどもを通しての教育の現場は、浜松ではそれほど革新的ではないですし、むしろ保守的なまちだと思います。もちろん産業のまちですからがんばる人は多いのですが、大きい企業も多く、あまり文句を言わない気質の人たちが圧倒的に多いのではないかと思います。それに対して、声を挙げていかなければいけない、自分たちの問題は自分たちで解決していかなければいけないよね、という人たちがいるし、鈴木一郎太というディレクターが、そういう浜松の気質を改革したくて活動してきたことが、今回につながってきたとすごく思っています。

**谷川** 今回とりあげたのは個別の小さなものなので、個々のレベルに委すと。日本全国あるいは世界の中

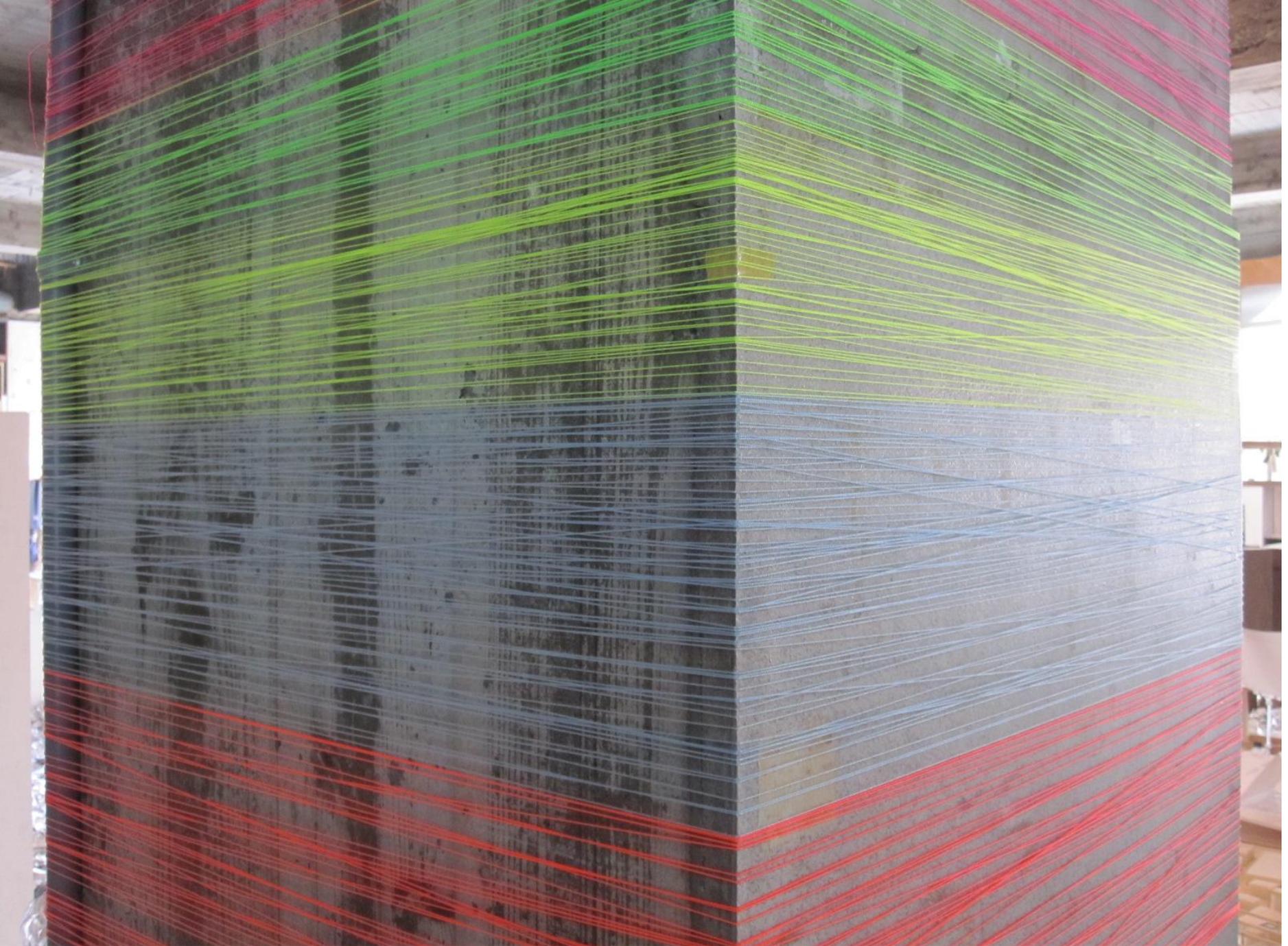
を集めてみると、なんとなく「浜松らしい」みたいなものが醸し出されてくるような、そういう感覚がちょっとありますね。

**鈴木** 僕も、集めることでなにかぼんやりと見えてくるものがあるかもしれないところから始めたんですね。その根底には久保田さんが言われた問題意識があり、今回はふたつの視点から集めています。ひとつは生活に根付いている活動であるということです。14のそれぞれは小さなものであり、小さいからこそ、生活に根付いているし、自分たちの生活のペースとうまく帳尻を合わせながら活動しています。暮らしや風土や地域の歴史などが、その人それぞれ生活の中で触れたり吸い上げられていきます。そういう影響をうけている「個人」として活動していることの先には、「この場所ならではの文化」みたいなものになっていく可能性があるのではないかと。仕事とは違って、すばんと切り取れたり、割り切れたりはいしないことの良さがあって、それが地方都市の暮らし方の一例になるのではないかと、そんなことがこの展覧会から見えてほしい











# Projectability

～この街で起きていることはどうしておもしろいのか？～

3月1日(土)～3月23日(日)

月・木・金 13:00～19:00

土・日 11:00～20:00

休館日 火・水曜日

展覧会:17日間開催 557人来場

アートワークの楽しさ、地域の活動の再認識、空きビル活用への興味

展示がわかりにくい

通りすがりの入場:約20%  
(アンケート114から推定)



## HPなどWEB発信



創造都市推進会議プレゼンテーション  
浜松市企画調整部

プロジェクトカタログ  
B5版144p 1000部印刷配布中

協働クリエイター:20人  
協働学生:42人+アルミの落ち葉制作

報道  
NHK、静岡新聞など

